

聖書:士師記6章11～24節

説教:力ある勇士よ、主があなたとともにおられる

はじめに

すでにお知らせのとおり、今日の午後から2025年度信徒総会を開こうとしています。もしみなさんのご承認をいただくことになれば、後任牧師を求めるための具体的な活動を始めていくという大きな一歩を踏み出すことになります。そこで2025年度の道標聖句に士師記6章12節のみことばを掲げたいと願っています。主がどのようにしてギデオンを選び、イスラエルの新しいリーダーに立てていったのか。そこから私たちはいま何を教えていただくのか。ともに考えてまいります。

1 士師記の時代

1) 次の世代

「士師」ということばは、あまりなじみがありません。語源は2章16節からきています。「そのとき、主はさばきつかさを起こして、略奪する者の手から彼らを救われた。」このなかの「さばきつかさ」を中国語聖書で士師と言っていたのが由来で、それ以来日本語聖書で使っています。

士師記の時代は、紀元前13世紀から12世紀、ヨシュアが亡くなってからイスラエルに預言者サムエルが現れるまでの間に起きたことを取り扱っています。そのときのイスラエルがどんな状態であったのかは、先ほどお読みした2章16節の「略奪する者」ということばが端的に表しています。ヨシュアが亡くなると、跡を継ぐ有力なリーダーが出てこない。おまけにしっかりとした信仰をもっていた親の世代が高齢化していなくなると、次の子どもの世代は主を知らないと言う人が出てくる。そうするとどうなるか。だんだん信仰が曖昧になっていき、カナンにもとから住んでいた人たちが拝んでいた神々を拝むようになっていく。

2) 主に従わなかった ミディアン人の襲撃と略奪

それでいつものパターンの繰り返しです。イスラエルの子らは、主の目に悪であることを行い、主を忘れて、もろもろのバアルやアシェラに仕えていくようになる(3章7節)。もちろんこのままで済むはずはありません。主の怒りがイスラエルに向かって燃え上がり、イスラエルをミディアン人の手に渡されます。具体的には、収穫の時期が来るとイナゴの大群のように集団となって攻めてきて、麦も羊も牛もろばも、とにかく徹底的に奪い取ってい

く。そういうことが毎年繰り返されるの。イスラエルの人々はミディアン人を恐れて洞穴に隠れしかなくて、戦うという力もなければ信仰もありません。

3) ひとりの預言者を遣わす(8～10節)

そんなとき、主はイスラエルに対してひとりの預言者を送ってみことばを語ります。ギデオンのことをよく理解するためには、その話しに触れておく必要がありますので、6章8節から10節を読みます。「わたしはあなたがたをエジプトから上らせ、奴隸の家から導き出し、エジプト人の手と、圧迫するすべての者の手から助け出し、あなたがたの前から彼らを追い出して、その地をあなたがたに与えた。わたしはあなたがたに言った。『わたしが主、あなたがたの神である。あなたがたが住んでいる地のアモリ人の神々を恐れてはならない』と。ところが、あなたがたはわたしの声に聞き従わなかった。」

ギデオンはこれを聞いていました。そこから二つのことを彼は学びます。一つ目。自分の親や祖父の世代は、主がモーセを遣わしてイスラエルの民をエジプトから救い出してくれたことをや、モーセの跡を継いだヨシュアがこの約束の地に導き入れてくれたことを直接経験していました。ところがギデオンはその次の世代に属しますから、主をほとんど知らないまま育てられた。主のことを聞いたのは、主が遣わしたひとりの預言者のが語ったのを聞いたのが初めてだったかもしれない。主という方が自分たちの神であると教えられた。これが一つ目です。

ギデオンが教えられたことの二つ目。ギデオンが生まれて物心ついたときからミディアン人が襲ってくるのは当たり前でした。強い者が勝ち、弱い者は負ける。世の中はそういうところだとずっと諦めていた。ところが預言者の口を通して教えられたことは、まったく違うことでした。エジプトから先祖たちを救ってくださった主を捨ててほかの神々を拝み、この世と妥協して、主の目に悪であることを行ってきたので、いま自分たちはミディアン人たちが苦しめられている。自分たちが犯した罪のゆえである。苦しむ原因が自分たちの側にあった。これが教えられたことの二つ目です。主はイスラエルを見捨てたのだから、自分で蒔いた種、自

分で刈り取るしかない。ギデオンは二つのことを教えられながら、でも諦めるしかなかった。そんなとき、主の使いがギデオンのところにやって来ます。

2 ギデオン

1) 最も弱い者である

11節を読みます。「このとき、ヨアシュの子ギデオンは、ぶどうの踏み場で小麦を打っていた。ミディアン人から隠れるためであった。」

以前、イスラエルに行かせていただいたとき、聖書の時代のぶどうの踏み場を再現したものを見ました。斜面になっている地形を利用して、上の方でぶどうを踏むと斜面の下に掘られた窪んだ池になっているところぶどう汁が流れてきてたまる、そんな構造になっていました。ギデオンが小麦を打っていたのは、ぶどう汁がたまる窪んだところでした。しかし普通はそんなところではやりません。そもそも小麦を打つのは、風の力を利用できるところでやるものです。軽いもみ殻を風の力で飛ばし、重い実は下に落として選り分ける。ですから丘の上とか見晴らしがよくてよく風が通るところ行こう。ぶどうの踏み場では風は吹きません。なぜそんなところでやったのか。理由は簡単。そこならばミディアン人にみつからないと考えたからです。もし見つかったら、ごっそりともっていかれる。

これだけ見ても、ギデオンのひととなりがおよそわかります。勇気があったら堂々と見晴らしのよいところで小麦を打ち、もしもミディアン人が襲って来たら追い返してやろう。そんなことを考えたでしょう。ところがギデオンは自分の口でも言っています。自分は兄弟の中で一番下の末っ子で、おまけに兄たちも全能力がない。これではどうしようもない。それで隠れて小麦を打っていた。

2) 信仰

ではギデオンは、ただの臆病な人であったのかというところではない。別の面をもっていた。御使いとギデオンのやりとりを見てみましょう。御使いはこう言いました。「力ある勇士よ、主があなたとともにおられる。」

ギデオンはこれを聞いたとき、おそらたいへん腹を立てたのではないと思われる。理由は二つあります。一つ目は、今も言ったように自分は若くてミディアン人と戦えるような力はないし経験もない。おまけにマナセ族の中でもまったく取るに足らないような一族に属する者だという自覚があ

る。そこへ「力ある勇士よ」と呼びかけられた。ふだんならなにかの冗談かと受け流したかもしれない。けれども、いまは生きるか死ぬかというギリギリの所で仕事をしているのです。「おまえ、けんかを売りに来たのか。」そのくらいの勢いで腹を立てたのではないか。

ギデオンが腹を立てた理由の二つ目は「主があなたとともにおられる」ということばにあります。自分たちが苦しんでいるのは、主がともにおられないからではないか。それなのに「主があなたとともにおられる」とは何を寝ぼけたことを言っている。主がともにおられるのなら、どうしてミディアン人はなお自分たちを苦しめているのか。死ぬか生きるかの瀬戸際にいるときに聞いたのですから、腹の虫がおさまりません。それで彼は13節で怒りを爆発させます。「ああ、主よ。もし主が私たちとともにおられるなら、なぜこれらすべてのことが、私たちに起こったのですか。『主は私たちをエジプトから上らせたではないか』と言って、先祖が伝えたあの驚くべきみわざはみな、どこにあるのですか。今、主は私たちを捨てて、ミディアン人の手に渡されたのです。」

ギデオンはこう訴えているのです。主があなたとともにおられると言うけれど、イスラエルがミディアン人に苦しめられているのを知っているのか。主が私たちを捨てたからこうなっているではないか。なぜあなたは気休めを言うのか。いっけんだ腹を立てているようだけれど、そうではない。ギデオンは言いたいのです。かつてエジプトからイスラエルを救ってくださった主であるならば、どうして今主はこのイスラエルを救おうとされないのか。神に対して怒っているのです。これがギデオンの信仰でした。

3 主の救い

1) なぜギデオンが選ばれるのか

イスラエルをミディアン人の手から救うのは、誰が一番ふさわしいのか、普通はこう考えるのではないのでしょうか。素人ではいけない。力はもちろんだけれど、戦いの経験が豊富で、何にも動じない精神力がある人。おそらくそんな答えがくるでしょう。しかし主が選んだのはそんな人ではなかった。いま見たとおりにギデオンは、兄弟の一番下ですからいつもはたれ小僧のように思われ兄たちから邪険に扱われていたような人です。自分でも若いし経験もないし、なんのとりえもない者だと思っていた。ミディアン人から身を隠すようにして小さくなりながら小麦を打つ平凡な人でした。

2) 荒削りの信仰者でも

では信仰はどうだったか。ミディアン人と戦う力はなかったかもしれないけれど、いま見たとおりです。どうして主はイスラエルを救ってくれないのかと怒りを露わにしました。イエスの母マリアが御使いから「おめでとう恵まれた方」とあいさつを受け、イエス誕生のお告げを受けたとき、「どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように」と応えたのとは正反対です。「あなたはイスラエルをミディアン人の手から救うのだ」と言われると、「そんなことできません」と言って先ほどの元気はどっかに飛んでしまい、すっかりおびえてしまう。そんな実に荒削りでまだまだ成熟していないひとりの信仰者に過ぎませんでした。

でも神はそんなギデオンを選ぶのです。あなたはほんとうに主の御使いなのかと疑って迷っているギデオンには、岩の上の肉と種なしパンを火で焼き尽くすという奇跡を見せて、励ましていく。そのようにして確かに主はともにおられるとの確信を与え、瞬く間にギデオンは力を得て、戦いに出ていくのです。

3) 主が与えてくださる

私たちは、後任の牧師を迎えるための具体的な準備を始めようとしています。献身者が足りないといわれる時代に本当に与えられるのか、不安はあります。しかし、主の救いはどこからの来るのでしょうか。一生懸命、自分はこれでもできます、あれでもできますと面接試験でアピールする人か。そうではない。もしかして、私たちの目にはどこか頼りなく見える人かもしれない。本人さえも私ですかとまどうかもしれない。しかし、主のみこころならば、たとえ荒削りの信仰であっても主が育てるのです。そして、ああ本当にこの人だたのですねと心をつつにして受けとめられていく。そのような人を主が与えてくださるというのです。

私たちは主が与えてくださることを祈りながら、また期待しながら歩んでまいります。